

村岡典嗣『日本文化史概説』

開戦前夜に読んだ日本文化論

木田 宏

もう長い間気に掛かっていた本があった。

村岡典嗣の『日本文化史概説』である。学生の頃、この本に出会った御蔭で、以後の読書に思いがけない弾みがつき、本居宣長を読むようにまで成った。法学を学び、実務に就くことを考えていた者として、決して深入りをしたわけではない。しかし、本書によって日本思想を考える手掛かりを得ることが出来たことは、誠に印象深いものがあった。それゆえ、同書はもとより、村岡典嗣の日本思想史研究、さらには彼の編集に依り送本の始まっていた本居宣長全集の受取を家族に託して、戦地に赴いたのであったが、留守中の疎開騒ぎで、一番思い出の深い日本文化史概説が見えなくなってしまう。折りにふれては思い出し、もう一度読み直してみたいと思ってい

た時、本稿の依頼である。とり急ぎ、図書館から借り出して、文字どおり再読してみた。

今も昔と余り変わらないようであるが、中学、高校の歴史は暗記を強いられ、さっぱり面白くなかった。いきおい、歴史の本は敬遠するようになる。それでも、なにか権威とされる程の本は読んでおく必要があるであろうと、黒板勝美の国史概観、西田直二郎の日本文化史序説などに取り組んで見たこともあったが、中々気分が乗るようにはなってくれない。所詮、編年史的な政治史中心の歴史は性に思ひ込みを変えてくれたのが、岩波文庫に納められていたランケの世界史概観であった。書き手によっては、歴史も中々面白いという一縷の望みが残った。そのような折り、ふと

した機会に書店の書棚から手にした薄い冊子が、『日本文化史概説』である。

村岡典嗣がどんな人かは、知る由も無かつたのであるが、とにかく読み終えて、初めて、日本の歴史にも発展の流れがあり、政権の確執、抗争の底にも、それを動かす文化のうねりのあることが分かって、このような歴史を記す村岡典嗣の物の見方に心を惹かれてしまった。そして、その著作を追ってみた。幸いにも手元に残っている『増訂日本思想史研究』、『続日本思想史研究』の書き入れを見ると、昭和十七年の二月と三月にそれぞれを讀み終えたところから、『日本文化史概説』は昭和十三年の初版ではあるが、それを讀んだのは昭和十六年の頃であったであろう。わが國が未曾有の大戦に突入しようとした頃に、日

本文化について、日本精神、日本思想について、若者の欲求に応えうるものを与えて呉れたものと思われるのである。

今、二冊の日本思想史研究を取り出して見るに、中々専門的な論文集で、とてもそれらが、専門外の若者に当時理解出来たとは考えられない。しかし、両書を通じて、本居宣長に繋がり、「うひ山ふみ・鈴屋答問録」、「玉勝間」さらには、「本居宣長全集」と書架に並べて、宣長の心の広い的確な学問的方法論に感心した書き入れのある所を見ると、村岡典嗣が上記二冊の研究書に納めた「国学の学格的格」「史家としての本居宣長」「日本精神について」「日本思想史の研究法について」などの論稿に啓発された所が少なかつたのであろう。それにしても、一冊の冊子が与えて呉れた感動とその影響は極めて大きい。私にとっての古典として紹介することは許されるであらう。

——日本文化の特質とは

さて、日本文化史概説を読み直して、印象に残る所などを紹介しながら、若干の感想を書き記してみることにする。

本書は全文百三十ページばかりで、序説、五章、結語より成っており、五つの章は、太古、上古、中古、中世、近世の時代区分に応じた文化をそれぞれ説明する。この時代区分

は、当時の通説に従ったとしてゐる。今日の古代史は、大きく書き改められてゐるようであるが、いま、そのことを問題とする必要はないであらう。

序説においては、文化が、福沢諭吉の文明論之概略に言う文明開化、文明にほぼ同じであるとしながら、文明の功利主義的傾向に対して、文化は理想主義的傾向を有するとした上、「文化の歴史を我国に求める時、顕著に認められるのは、輸入的性質である。日本文化史は、大体に於いて、前には支那、後には欧米の大陸文化の伝来と学習との歴史である。」と概観し、しかも日本文化史にして、「大陸文化史の単なる延長でないために、その伝来と学習との間に形成し発揚し来つた、何等かの獨創性、特殊性を対象としなければならぬ」とその学問的課題を指摘する。

この日本文化史の特質をどのように村岡典嗣が説明するかは、下手に紹介するよりも、読んで貰うに若くはない。しかし、経済摩擦、文化摩擦が声高に報ぜられて、国際化への対応が大きな課題とされている今日、何が日本文化の特質であり、何を残し、何を捨てることができるかは、我々の常日頃、問われている課題である。この昨今と、本書が著された当時の国際環境とは、何処か似通つた状況にあるとも考えられるので、本書が今日の課題

にどのように応えてくれるか、極めて興味のありところであつた。

それにつけても、本書が明治以後に触れていないことは、大きな問題である。このことについて著者は、

「我国の文化は、支那大陸文化を摂取して徳川時代までの五期に、一応の成長を遂げ了つたといふべきであり、——わが国の文化史は、大きくは明治を境として、その以前と以後に分かつべきで、明治以後の半世紀は、決して所謂第六期として、前述の五期に伍せしむるに適當しない。されば未だ経過して一世紀にも満たない今に於いて、この全く新たな時代の文化を概観するとしても、それは厳密には学的不可能事といふべく」

との立場を取っている。然し、明治以後一世紀を経た今日、政治的、経済的、文化的に、世界の各方面から日本が問われている時、この同じ態度を採りうるか否かは、大きな問題である。この点をどのようにして学問的に論ずることが出来るか、序説の提起する所は、極めて重要な問題点を示していると思われる。

——古代日本の進取性

第一章の太古の文化は、儒教渡来以前の神話と伝説の時代を採り上げる。宗教、政治、道徳、経済など生活の諸活動が未だ分化して

いない状態にある単純素朴な時代であると言
う。有力な地位を占める宗教は、神道むしろ
神事であつて、自然崇拜、祖先崇拜を旨とす
る。しかし、この伝説の時代においても、韓
半島や支那大陸との交渉は、早くから行われ、
大陸文化の影響を受けたり、国際的意識の覚
醒、「天皇氏を中心とする統一と国体の形成」
といった氣運が促成されたと指摘する。

第二章の上古の文化は、「新羅征伐時代に始
まり、奈良時代に完成した」とする。即ち、
五世紀から八世紀の間を採り上げて、仏教の
渡来と大化の改新に焦点を当てている。そし
て、先ず、新羅征伐の文化史的意義として、
國民精神の高揚と文教の渡来を重視し、「王仁
に開かれたこの文教の渡来は、國民の爲に、
一つには文字、而して二つには更に教学の習
得の端を開いたものである」として、文化に
對する「帰化人の寄与貢獻」の重要性を挙げ、
さらには、そのもたらした儒教思想が「古神
道の自然主義を道德化し、合理化して、國民
の道德思想を涵養して行つたこと」を指摘す
る。

百濟の聖明王から伝えられた仏教の伝来は、
崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏の対立抗争
となり、結局崇仏派の勝利となつたが、それ
は、進歩主義の勝利であり、やがてまた、文
化主義の勝利であつて、「この氣運を代表し指
導した偉大なる人格は、実に聖徳太子その人

であつた」と述べている。

この仏教伝来の文化的意義は、「我等の祖先
をして、こゝにはじめて宗教と、単なる現世
以上の理想の世界の存在とを知らしめた」こ
とであり、また、これに伴つて「そのもたら
された文化の諸相中、殊に高級の芸術が存在
した事」にあるとする。そして以下次のよ
うな記述が続くのである。

「この実用以上の美の世界を知り、現世以
上の理想の世界を知つたといふ一事こそは、
実に我々の國民にとつて、新しい驚くべき
経験と言ふべきものであつたと言はねばな
らぬ。仏教渡来のわが國に於ける文化史的
意義は、思ふにこのロマンチズムに求む
べきであらう。仏教主義者の聖徳太子が、
我國最初の文化主義の政治家でおはしたこ
とは、この故である。太子の文化主義の政
策の諸方面を見るに、まづ有名な十七条憲
法の制定は、政治に仏教的、儒教的の道德
的理想を掲げ、よつて則るべき基準を示し
たものである。——」

そして、冠位や曆法の制定、正史に記され
た國史の選録、遣隋使及び留學生の派遣など
に、「大陸文化への憧憬の、最も著しい現れを
見る」としながら、

「かくの如きロマンチズムの受容と発揚
との背後には、又、国力の充実といふ現実
の根拠が存在したことを逸してはならぬ。

而してこの国力の充実に伴ふ内的必然に促
されて、大化の改新や中央集権の政治を実
現することとなり、更にまた、奈良朝文化
の花を咲かしめることとなつたのである。

と説明する。

このように歴史的事象の意味を語り掛ける
説明が、いかに新鮮な響きを与えて呉れたか
は、容易に理解して貰えるであらう。今日読
み返してみても、著者が当時抱いていたであ
らう問題意識、即ち、昭和前半の日本社会に
とつて、また、緊張の高まる当時の國際環境
の下にあつて、文化の形成という観点から何
が重要であるかを訴えようとする著者の心意
氣が響いてくるように思われるのである。

大化の改新により、中央官制をはじめ地方
官制、田制、税制、位階制、俸禄制、教育制
度、軍制、刑罰制など、中央集権的な国家制
度の体制が整い、天平時代を盛時とする奈良
朝の文化が栄えた。それは、仏教及びそれに
伴う仏教藝術と文学に示されている。東大寺
の大仏、天平の彫刻に示される仏教とその芸
術、文学においては、日本書紀、古事記を掲
げるだけで、充分であらう。それは、遣唐使、
留學生等によつてもたらされた唐代文化の精
華を裏押ししたものであり、その本質に
おいて、輸入的であり、また、貴族的である。
しかし他方において、その天平以前に、万

葉集の存在することは、わが国文化の特異性を示すものとして、次のように説明する。

「万葉集は、単に朝廷の貴族のみならず、各地における各階級の人々を作者とせるもので、かの仏教や詩文の如き貴族性に限られてをらず、また、国民本来の歌謡として、同じく両者の如き輸入性を有せぬ。仏教美術が国産とはいひながら、その工作者が概ね韓人、もしくはその遠からぬ子孫であつたのとも、趣を異にしてゐる。要するに當時の文化財のいづれに比しても、最も多く国民的と言ひ得るものである。而してこの万葉集たる、その歌調に、措辞に、感情に、思想に、自然と素朴とを、しさと素地を保存して、しかも洗練純化の美しさを有したものであつた。吾人はこゝに、現実とロマンチズムとの結合になる、我上古文化の真義のいみじくも発現せられたるを見る。

そして、「この万葉集に汲み得るが如き素朴にして雄健な国民精神の力——この素朴さと雄々しさとこそ、実に外国文化を摂取してよくその過重にひしがれず、文化的国家として躍進した根源となつたものである。」と説明する。万葉集に見るこの当時の国民の健やかな進取的気象こそ、賀茂真淵や本居宣長が「ますらをぶり」と呼んだ古代精神の特質であるとするのである。

文学が文化の至高の時代

中古の文化について、第三章は次のような文章で始まっている。

「文学は、必ずしもその時代の文化の最高価値を示すものではないにもかゝらず、もつともよく之を代表するものたることは、疑ひない。而して単にそののみならず、よくその最高価値をさへ代表し得たといふべき場合を、吾人は実に、わが中古即ち平安朝に於いて見る。而してこれまた、中古がわが文化史上に有する特色とするに足りる。」

この平安時代には、空海、小野篁、菅原道真等数々の文人、学者が輩出し、凌雲集を始めとする勅撰詩集が編纂されている。また、弘文院、学館院、奨学院、勸学院、綜芸種智院などの私学が初めて設立され、一族の子弟その他の志あるものが組織的な教育を受けうるようになった。また、仮名の発明と流行によつて、国民が国語の自由な表現と学習の手段を持ち得るに到つたことは、文化史上に特筆大書すべきことであろう。

藤原一門の榮耀榮華に結晶された中古の文化は、唯美的現世享楽主義に流れて行く。天台、真言の即身成仏主義も、荘嚴な法会となつて、それに寄与することになる。こうした時代の文芸を特色づけるものは、「素朴でなくて感傷であり、雄健でなくて優美である。こ

れ中古の文化の女性的なる所以である」として、清少納言の枕草子と紫式部の源氏物語などを挙げてゐる。源氏物語の理想的な写実に、代表的な貴族の生涯が余すところなく示され、「官能の洗練に、情緒の優艶に、一種の縹渺さをもつてかもしいだされた美の空氣」があるとする。そして中世の文化は、「ここに強き魅力を有し、また価値を存する」と評価しているのである。

しかし、この中世の文化には、「貴族的、都會的偏異」があり、都市と地方との懸隔が甚だしくなり、秩序は紊乱し、盜賊は横行して、平将門の乱の如きも拡がって、やがて、政権の末期的傾向が進んで行く。院政の時代には、栄花物語、大鏡などの歴史文学が出現し、平家興亡の事実とも相まって、末世観、厭世観がうまれ、浄土思想とともに浄土宗の成立もあつて、次の、鎌倉、室町の時代へと移って行くことになる。

下剋上の中の一一般文化

第四章に入つて、中世の文化については、文学に代わつて、宗教、政治、道義といった方面が主役となり、「文に対して行が中心の意義を有した」と概観する。初期の鎌倉時代は、武士が初めて政権の座につき、武家法である貞永式目を制定して、国内の秩序の維持に務め、政治的公正の理想を実現しようとした。

このこと自体、「わが国の文化の新たな創造に外ならない」とする。そして、この武家政治のうちに表現せられた時代の文化の精神的內容としては、新仏教、武士道、中古趣味の三つが挙げられている。

新仏教に属するものは、浄土宗、真宗、時宗の浄土教、臨濟、曹洞の禅宗、及び日蓮宗などであり、法然、親鸞、一遍、栄西、道元、日蓮などの偉人が輩出している。もとよりその開宗者の人格、その教理、信仰において、各宗派はそれぞれに異なっているが、しかもなお、それらに共通した特色として、「第一に、古代の貴族仏教に対して庶民的、第二に、同じく学解主義、戒律主義に対してむしろ反学問、反戒律的、第三に同じく教理や教義の複雑であり、煩瑣であるに対して、簡單直截、凡て実行的」であり、現実生きむとする実行的精神に相通するものがあると指摘している。武士道については、次のような説明が見えている。

即ち、「武士道とは、——多年の軍陣生活のうち訓練され、陶冶された風習であり、道徳であつた。——一切の感傷や文飾とは正反対に、意力と質素とを特質としたものである。それは本来教学の知識の結果ではなくして、実際の体験のもたらしたところであつたが、武士の社会的地位の向上に伴つて教育が普及するや、儒教や仏教、または、

文学等の教養によつて、ますます純化され精練された。」

平家物語など戦記文学の文体となつた和漢混淆文は、まさしくこの時代の創造であつて、「その語彙の漢語、仏語を取り入れて豊富複雑なる、その文脈の漢文を学んで簡勁なる、こゝにも中古のたをやめぶりに対して、中世の丈夫ぶりが存する。」と和漢混淆文に時代の特質を認めている。

次に、文永、弘安の役といつた国難とその勝利、また、建武中興といつた事件が、国家的精神の覚醒を促したこと、また、その現れとして、日蓮の立正安国論、神道五部書、資治通鑑、神皇正統記、宗良親王の新葉集などが紹介されている。

建武中興の失敗は、後醍醐天皇の政治宜しきを得なかつたことに原因することをあげ、鎌倉時代に発展した武士道の精神が、足利氏を北条氏に代わらしめたと指摘する。

その足利氏が、京師にその政府を置いたことは、中古化を図つたもので、金閣寺、銀閣寺の造営を始め、能、狂言、連歌、俳諧、茶の湯などの風流を促し、応仁の乱などの乱世をよそに、東山文化の花を咲かせることになつたが、幕府の政治的能力はやがて失われて、群雄割拠、弱肉強食の世となつていく。道義は落ち、下剋上が世相といわれる時代になつていくが、それを「決して無意義の暗黒時代

ではない」として、次のように評価する。

「応仁の大乱後、その状態（將軍の權威喪失）は益々著しくなり、地方に政治的中心が数多生じてくるとともに、それ／＼文化の特色が発揮され、それが、一般文化の発達に、すこぶる貢献するを見た。足利学校や金沢文庫が、京都の五山と共に、戦国時代の学問を司り、欧州にまでも関東の二大学として伝へられた如き、貿易船の勘合印を司つた大内氏の博多における如き、その著しきものであり、九州や西国の諸侯が、はやくポルトガル人等によつて、西洋の文物に接し、鉄砲その他の伝来を見たのは、同じく天主教を伝へて、遣欧使節の壮挙を試みたこととともに注意される。」

かくして地方の諸侯が力を蓄え、国内の分裂、動乱の中、実力によつて天下統一の大事業を果たし、中世末期の社会的改造を迅速に、目覚ましく実行したのが、信長であり、秀吉であつた。

鎖国から国際文化圏へ

第五章近世の文化は、そのような天下の統一が、「再び徳川幕府でふ武家の封建時代の建設を見ることとなつた。こは何故であらうか」という問い掛けで始まっている。それは結局のところ、鎌倉、室町の中世の封建制度が、未だその使命を果たし尽くさなかつたからで

あるとして、次のように徳川時代の文化史的な意義を説明している。

「換言すれば、国民精神に、自己に対する深刻なる批判、反省を生じせしめるまでに、封建政治そのものが、成熟しきらなかつたからである。而してかくの如き批判、反省は、国民の学問的発達の結果に、その発生を俟つべきものである。かくて歴史上前代未聞の平和の持続のうちに、専ら諸方面に於ける教学の発達を、その文化の主なる内容とした徳川時代は、自らを批判、反省せしめる為に、存在したと言ひ得る。」

その意味においても、徳川家康が公家諸法度、武家諸法度の第一に学問や文武の道を掲げて、政治の根本を文教においたということが、大きな意義をもっていると言ふ。儒学の奨励に務め、藤原惺窩、林羅山などの学者を起用し、重視した。浄瑠璃、歌舞伎、俳諧、浮世絵などの庶民的な文化の芽も萌えだしている。

この徳川時代の政策として、最も重大な影響を後世に与えたものは、鎖国であろう。鎖国が、わが国その後の発展に如何なる意義を及ぼしたかについては、既に早くから、様々な積極、消極の評価が述べられている。村岡典嗣の同時代人を取ってみても、和辻哲郎、辻善之助、徳富蘇峰らは、日本の発展が阻害されたとの消極的見地を取っている。これに

対して、村岡典嗣は、ケンペルのような傍觀者的態度からではなく、また、国学者一派の排外主義からではないとして、次のように肯定的評価を行っている。

「吾人は我文化史上の当然また必然の階段たる、明治の開国及び国際的国家としての登場のための、準備的過程といふ意味に於いて、この鎖国が我文化を成熟せしめるに貢献したことを、認めようとするものである。けだし近世前期の啓蒙時代だけを以てしては、我文化は、未だ欧州文化を摂取、消化する資格を備へるに至らなかつた。この鎖国時代に於ける教養によつて、西欧文化に接して、敢へて之に圧倒されず、よく之を我ものとすることを得たのである。——」

鎖国によつて一切が遮断されたわけではなく、オランダや支那との交流は持続し、外国文化の刺激は国民の進歩的要素に働き掛けて、元禄文化の花を咲かせ、儒学、国学、蘭学、史学の興隆はもとより、西鶴、近松、芭蕉のような平民的文芸の爛熟をもたらすに至つた。また、国学と蘭学とが、その実証的学風において、相共通し、さらに、国学の国家的自意識と蘭学の世界的知識とが相まって、国家的自覚の喚起に貢献したと指摘したうえ、

「近世文化のかくの如き発達と爛熟とは、武家封建制の幕府政治の、もはや包容し維持するに堪へがたいものであつた。神道や

国学や史学やまた儒学等の教学にもとづく、国体観念や国民道徳への反省は、当然幕政に対する非難の刃を含んだ。蘭学による国際的識見は、鎖国主義に対する批判の矛を蔽した。文芸その他諸方面の文化における庶民の参加は、彼等の個人的自覚をもたらした。——江戸に集注して実現された文化の偏つた爛熟は、その極まるどころ、自ら社会的改造の機運を、準備するものとなつた。」

と記して、各方面に漲る学問の発達が、王政復古の理想を実現させ、わが国を鎖国孤立の状態から、国際的文化国へと転換させることになる。かくして、「明治維新を緒として、世界的日本の最近世文化の歴史は、初まるのである。」と、近世までの日本文化史を結ぶのである。

——日本文化の普遍性

以上によつて、「上古以来の我文化の発達が、専ら儒教文化、仏教文化等の外来文化によつて之を見た」とする村岡典嗣の論旨はお伝え出来たであろう。それでは、わが国の文化が単なる外来文化の模倣ではなく、特色ありとするのは、何処に求め得るか。「結語」において、彼は、次のように、わが文化の発達と国体との関係に言及している。

「思ふに一方に優秀な外国文化に接して、

つぎつぎに之を学習した謙抑さや寛大さと、よきものを求めて已まない熱意とこそ、我國の文化の発展の原因であつたとともに、他方に外国文化を撰取することかくの如くであつて、しかも之に圧倒せられることなく、よく物的又心的の独立を保持して、他國に服属的關係を結ぶが如きことなかつたのは——國体の儼乎たる存在が、最大の理由を為すと考へざるを得ない。加之、一層積極的にも、文化のかゝる発達に、我國體の関与するものが少なくなかつた。けだし我國體が、本来の性質に於いて、何等特定の理論や主義に立脚せず、むしろ自然で、随つて頗る弾力性や適應性に富んだことこそは、よく様々の外来文化の優秀なる価値を受容せしめた所以である。

このように、日本文化の特質を國體に結び付けていることについては、今日、疑問とする向きもあるであろう。しかし、著者の用いる國體の語は、「國家の性格」、「國家がその歴史に於いて実現しゆく道德的性格」（日本の歴史の特質と精神文化の業績——日本思想史研究 第四）を意味するものであつて、「性格なるが故に、それは理想化されてゆく事實であり、同時にまた、実現されてゆく理念である」としているのである。そしてまた、本書の最後の一文が、日本文化が、「文化的内容的發達を伴はないでは、所謂國體の特殊性も、それは単

なる特殊であつて、普遍的価値の承認を要求し得べくもないからである。」と締め括られて、いることを特に指摘しておきたい。村岡典嗣にとつては、國の倫理的、道德的性格とともに、その築き上げる日本文化の内容が普遍的価値を持つていなければ、「世界文化のために寄与貢獻すべき」任務を果たすものとはならないとするのである。

村岡典嗣の死後刊行された日本思想史研究第四の「はしがき」で、吹田順助は、「敗戦後における思想界の新风向は、君の学風に対して別種の評価をさしむけているようである」と述べているが、今日読み返して、決して違和感の残るものではない。その学者的良心の広さと名文にして的確な論述に、当時と同じ魅惑を味わい得たと思うのである。

——万人に開かれた文化

さてそれでは、明治以後の日本文化の發展をどのように考えることが出来るか。村岡典嗣の言葉を借りて言えば、明治以後の日本文化史は、「西欧文化の教導又学習の歴史」であるということになるであろう。それ以前の儒教文化、仏教文化によつて築き上げられて来た國民の能力によつて、西欧の学芸、技術、社会制度を学習し、それを我物として、その成果と言うべき文化を築いてきた。それは、模倣と言へば模倣であろう。然しそれは、子供

の成長過程と同じであると考え。人は凡て先人の知識、技能に学び、真似をして、やがて、自己のものを身に付け得るようになる。このことは、國民文化についても同様であろう。東洋の文化であれ、西洋の文化であれ、先人の築き上げてきた知識、技術、また、社会的な諸制度が、地域的、歴史的な普及度と生命力をもつものであるとすれば、それはやがて、人類の共用し得る文化となり、他の人々の生活向上にも寄与し得るものとなりうる筈である。それは、誰の知見であり、どの民族の技術や制度であるとして、独占出来るものでもなければ、他の人々の学習を禁じうるものでもない。著作権も特許権にしても、長い歴史の流れから見れば、万人に開かれたものと言ふべきである。

このように文化は、誰もが学びうる知識であり、技術でありながら、そこに文化としての違いが生まれるように見えるのは、何故であるか。それは、個人の知識、技術についても、同じように考えることができるであろう。知的情報の流通に阻害さえなければ、今日は誰もが、如何なる知識や技術をも学ぶことが出来る。にも拘わらず、個人に得手不得手があり、好嫌があつて、その置かれた社会的、経済的環境条件とも相俟つて進路の選択が異なるように、國民文化の場合にも、同様のことが起こり得るであろう。それが即ち國柄、

国体ではないであろうか。文化は普遍的でも、国体は特質を持つということになる。

——日本型学習文化の展開

それにしても、日本の文化史を振り返るとき、我々の祖先が、一神教の信仰を持たず、八百万の神々と共に、現世の生活を樂しむという態度を持っていたことは、誠に幸せであつたと思う。抽象的な理念や主義主張の解明には弱く、従つてまた、世界的な思想、宗教の創立、学問上の基本原理の発見には、これまで他国の人々に提示出来るような実績を持つていないと言ひながら、旺盛な好奇心を保持し、原則や主義にこだわらず、目前の生活を現実的、技術的に改善し、人生を樂しむという態度を保持してきた。その態度に即して、知識、技術、芸能を、幅広く、また、熱心に取り入れて来たと言えるのではないであろうか。儒教や仏教の伝来、新仏教諸派の創設、仮名文字の開発、文芸、武士道、儒学・蘭学・国学等の興隆、そしてまた、今日の工業技術の発達にそれを見ることが出来る。

また、早くから、人種や社会階層間の断絶がなくなり、皇室を中心とした国民の一体感が生まれ、学問や芸能、文化が、公家、武家、町民その他国民一般に普及した。江戸期に於けるこの教育の普及度の高さが、西欧文化の学習に充分な素養を与えて呉れたのであつた

が、明治政府の積極的な教育政策は、国民の教育水準の向上を加速し、知識、技術の水準を先進諸国民のそれに比肩しようものとしたのである。

西欧文化に学んだ科学的思考とそれに基づく工業技術の導入は、儒教文化や仏教文化の導入よりも、遙かに迅速に、また、効率良く行われた。それは、西欧の科学的文化が、儒教文化、仏教文化よりも、より広い普遍性を有していたからであり、また、それを学習しうるだけの学問的素養が、江戸時代における学問、文化の普及によつて、広く国民の間に培われていたからである。

かく考えてくるならば、明治以降の百年における「西欧文化の教導又学習の歴史」は、それ以前の五期に続く第六期として、その文化史を構成することも、決して不可能ではないであろう。本質的には、同じ学習の過程として、それ以前と比較しながら、考察することが出来ると考えるからである。

しかしながら、第二次世界大戦を契機として、今日のわが国は、文化史的に、全く新しい段階に入つてきたと思われる。敗戦によつて、国際政治における発言力は失われたが、その努力を経済の発展充実に集中した結果、奇跡的な復興を遂げ、世界の人々が驚くような経済大国になった。そして、多くの国々から、経済援助と共に技術援助が求められ、日

本の文化が学ばれるようになったのである。他国の文化の学習をのみ事としてきた日本の文化が、他国の学習に比べ得る文化を意識しなければならなくなった。日本の文化史に全く新しい時代が始まつたと言ふべきである。

一方、戦後の世界秩序全体も、急激な変化に揺れ動いている。第三世界の台頭、南北経済格差の拡大、貿易摩擦の増大、核軍備の緊張などにより、世界諸国民の相互依存関係は深まりながらも、その不安定度は高まっている。科学技術の著しい進歩発展が、人間の行為能力を拡大させ、世界を相対的に小さくしたことが基本的要因である。今日の世界は、一つの地球社会という新しい世界史の段階に達しているように思われるのである。

しかし、この世界史の現状を先の日本文化史の流れに引き移して考えるとき、群雄が割拠し、経済や文化の格差が著しく、秩序が不安定であることなど、未だ室町末期の段階にあると言ふべきであろう。将来の世界秩序の安定の爲には、平和のなかに学問、芸術を競うという徳川三百年の経験を、今後必要としているのではないであろうか。

このような今日の国際社会にあつて、わが国が日本文化史の流れを通して寄与しうる所は、学問の普及、文化の振興こそ、人類文化の基本であるということである。

(きだ・ひろし)